

## 福島県の避難指示解除準備区域と女川原発見学

はじめに

11月3日（火・祭日）に東京から仙台へ車で移動。4日は仙台から女川へ行き、午前中は女川の町の見学、午後は女川原発を見学した。5日は、午前中仙台の市民運動のみなさんが組織する「市民による女川原発の安全性を問うシンポジウム実行委員会」の打ち合わせに出席、午後車で東京へ帰ってきた。その行き帰りの様子をご報告する。

### 1. 福島県の避難指示解除準備区域

朝ドラ「あさが来た」を見終わって、8時20分ごろに家を出、常磐自動車道をひたすら北上し、茨城県と福島県の県境手前の関本ICで昼食。そこでマスクをして、広野ICで高速道を降りて6号線を北上した。

天候は晴れ一時雨。お陰で空気中にチリはない。広野ICを降りてすぐのJビレッジ周辺をぐるりと回る。以前このサッカー場は、東電の前線基地で仮設住宅がびっしり建っていたが、それらは撤去されて閑散としていた。しかし、駐車場だけはいっぱいであった。

少し先の「道の駅ならば」は、相変わらず警察の前線事務所だが、やはり以前よりは閑散としていた。以前は、この高台から見下ろす近くの田んぼの中に除染廃棄物で膨らんだフレコンバッグが山積みだったが、どこへ行ったか無くなっていた。

そこを出て6号線を富岡町まで北上し、それから内陸に方向を変え、ちょうど帰還が間近に計画されている「避難指示解除準備区域」の川内村東部へ向かった。休日にもかかわらず、除染作業を盛んにやっており、山中の紅葉真っ盛りの谷合いの道路をダンプカーが列をなして走っていた。



川内村は、山間の閑静な街で、川内高原という観光地でもあり、温泉もある。閑静な田園生活を希望する人びとが水田・畑、そして立派な住宅を谷合いに構えていて、おそらくは完結した3世代同居の心地よい生活をしていただろうと思われる。聞くところによると、スーパーマーケットや病院は麓の富岡町に車で出かけていた由で、富岡町が全員避難している今では、この村に住むこと自体が困難になっているようだ（注2）。

川内村の東部地区を抜けて、すでに1年前に避難解除された地区にある中心部にある村役場の前を通ると「お帰りなさい 川内村」という横断幕が屋上に掲げられていた。しかし、帰還率は30%だそうで、車の交通はあるが、道を歩いている人影は見られなかった。



最近避難指示が解除された3市町村は下の表と地図の通りである（注1）。

	解除時期	帰還者状況	帰還率
田村市都路地区	14年4月	380人中198人(1年4カ月) (*)	52%
川内村	14年10月	104世帯中29世帯(1年間)	30%
檜葉町	15年9月	2700世帯中200世帯(1.5か月間)	7%



避難指示区域（福島県のホームページによる）

川内村から山間部の道を北上して、田村市都路地区へ入った。ここも近いうちに避難指示解除、賠償打ち切りが計画されている。道路沿いの放射線測定ポストは $0.4\mu\text{Sv/h}$ を指していた。その近所の田んぼは最近稲刈りがなされた直後らしく、黄色い切株が規則正しく並んでいた。果たしてコメの線量はどうなのか、と気になった。

葛尾村には、ゼネコンの大きな除染基地があり、仮設事務所が3棟ほど連なり、ダンプカーの広い駐車場があった。近くの谷合いの田んぼには、フレコンバッグの山が延々と連なっていた。近隣の山々が紅葉に彩られて、さぞ美しい村であったろうと思わせるだけに無残な印象であった。



頭の中に描いていた予定では、そこからさらに山中の道を北上して葛尾村、飯館村を通り、再び浜通りの南相馬市へ出ようと思っていた。ところが、葛尾村の北辺で交通止めになっており、東へも北へも進めなかった（上図）。2011年6月5日に、南相馬市から飯館村と川俣町を通過して二本松 IC へ出たことがあったが、その後通行止めになったことを忘れていた（注3）。つまり、飯館村の避難指示はずいぶん遅れて、結局、飯館村の人びとの被ばく量が多かったという結果になったのであった（注4）。

結局、西に向かって田村市中心部、三春町を通過して二本松 IC から東北自動車道に入って仙台へ向かった。

## 2. 女川の町

翌4日の朝、いつものように朝ドラを見て、8時20分ごろに仙台市内のホテルを出、一路女川駅へ向かった。三陸自動車道を最近できた石巻・女川 IC で降りると、女川への一車線の一本道をたどる。復旧された仙石線も並行して走っている。途中の小ぢんまりしたおじさんひとりがやっているガソリンスタンドで給油。東京からここまでで40リットルを消費したことになる。

1時間半ほどで女川の町へ着いたが、街中は至る所土盛りの工事中で複雑に通せんぼして集合場所の女川駅へ着くのに10分間ほどうろろうろしてしまった。津波高さは17m超であった。現在駅周辺や商業地域を15mの高さに盛り土しており、ダンプカーや建設機械がごった返している。過去に2回ほど来た時は市民病院を下から見上げて「あの高さまで津波が来たのです」という説明を聞いていたのに、今は新しい女川駅のレベルが市民病院とほぼ同じになっている。

10時過ぎに一行15名がそろい、地元の町議員の方が、丘の上の運動場に建設された町営住宅、難を逃れた中学校、谷合いの小高いところにある仮設住宅、水産工業団地、市

民病院などを案内してくださった。住民数は災害以前には約1万人、今は約7千人だという。工業団地からは直線距離で7kmほど離れた女川原発の排気筒が見えた。女川の水産業は年間300億円ほどの売り上げがあったので、原発がなければ生きていけないというわけではない、という説明があった。

また、個人的な会話の中で聞いた話では、近隣のリアス式海岸の入り江にしつらえたカキや紅鮭の養殖場では、以前は栄養豊富な天然の水が牡鹿半島の森から流れ下り、カキなどは2年で大きく育っていた。しかし、だんだん生産量を挙げるために過密な仕掛けを行ったり、養殖用の餌を増やしたり、抗生物質を混ぜたりしたために、生育が悪くなっていた。それが、津波でいったんご破算になり、最近再開された漁業では再び以前のような生育速度になったのだという。

それから、切り立った崖を左手に見ながら、山道を女川原発へ向かった。

### 3. 女川原発

一行15名が丘の上の原発PRセンターへ着いたのが12時過ぎ。そこで、持参の弁当を食べ、館内をざっと駆け足で見て回る。2階の展望室からは目の下に原発が見えるはずなのが、間の林の木々がさえぎって、ほとんど1号機と2号機の海岸寄りの部分しか見えない（3号機は完全に隠れている）。

13時から、副所長以下5名の方々が説明員として現れ、DVDを用いた東日本大震災時の様子とこれからの原発内の見学に関する注意事項などの説明があった。見学コースは一般見学者と同じではあるが、説明者を大勢動員したところは、われわれをウルサ型のVIP待遇にしたということらしい。

見学ルートのはじめは、標高62mの高台を掘り下げて作っている工事中の1万m<sup>3</sup>の淡水プールの建設現場。牡鹿半島の地盤は他の原発と比べるときわめて特殊で、1億年以上の古い蛇紋岩の硬い地層で出来ていて、地下水も通さない緻密な地盤だそうだ。そのため、この原発敷地近傍で大量の真水を入手できる地下水層がなく、北上川から延々とパイプラインで送水しているとのこと。過酷事故発生時に送水も途絶えたら海水しかなくなるので、それを防ぐために、現在過酷事故時のために大きな真水のプールを建設中なのだという。

次は、海岸の防潮堤である。敷地は14.8mで造成してあって、3.11の東日本大震災では辛うじて津波が敷地の上へ遡上することを避けることができたが、今後の最大遡上水位をO.P.+23mと予想し、それに耐えるために、高さ15m（標高29m）、長さ800mの防潮堤かさ上げを現在建設中で、その現場を見学した（注6）。確かに大工事であるがさぞかし金もかかっていることだろうと思った（東通原発の工事も含めて震災以降再稼働に向けての工事費総額は3500億円という）。防潮堤の一部は取水路を跨いでいるが、その取水路が従来耐震重要度Cクラスであったけれども、Sクラスに格上げして補強工事を施工中だという。



現在敷地内で働いている人々の人数を聞いたところ、1600人、そのうち正社員は400人余、東北電力内の業務を行っている協力会社の人々が約600人、建設会社とその下請けの会社員たちが600人ということであった。そして、再稼働直前になれば2500人になる見込みだという。原発は動いていなくても2000人近い人員が働かなければならない(たとえば、東電の柏崎刈羽は1基も動いていないが2000人の人員が働いており、「福島がたいへんなのだからそちらから応援を出すべきだ」という声が2013年に政府から出たとき、80人だけ移動させたということがあった)。つまり、福島事故後、老朽化原発や容量が小さくて安全対策費用をかける意味がない原発を差し引いて考えると、たとえ再稼働ができたとしても20基弱ではないかという予測がある(原発の発電容量を20~22%という経産省作成の計画は作った本人たちも信じていない)。したがって、動かす見込みのない原発の廃炉を早く決断することが大きな経費節約になるのである。そのことを強く望みたい。

その後、3号機原子炉建屋内へ入り、原子炉のオペレーションフロアを一隅の上方見学室から見下ろした。また、タービン建屋へ移って、タービン室を見下ろす見学室から、分解して保管中のタービンブレードの列を見学した。2年後に再稼働を目指して設置変更許可申請中なのは2号機で、3号機は動かす直前まで分解状態で待機中だとの話であった。原発内へ入って見学するのは今回が初めての経験であったが、予想通りという印象であった。

印象に残ったのは、テロ対策という目的で、本人確認、原子炉建屋内の入門管理を空港の金属探知機のようなゲートをくぐらせること、部屋へ入る時は2重扉をくぐらせることであった。確かに登録した人物以外の侵入を許さないというゲートチェックをしているに違いないが、武器を持って暴力的に破壊する集団にはまったく対抗できない、ソフトなゲートシステムである。

最後に、原発の講堂に集まって質疑を熱心に行った。その場で答えられない質問は後日回答してもらうことになった。この日の見学予定は13時から16時までの予定であったが、1時間延長で17時過ぎに終了した。

われわれにはとくに長時間を割いていただいたようだが、見学コースとしては一般人も共通のようで、見学者数は年間1万人を数えるそうだ。そうになると、美談ばかりが流布していてよいのか、と不安になる。後で地元の人々にいろいろ聞いたり、資料を見て考えたりすると、東北電力の優等生的な説明はいくらか割り引いて受け取らなければならないことが分かった。

1) 建設時に地盤高さを14.8mにして、津波の遡上を免れたことについて、東北電力は過去の地震記録をきちんと反映したという情報があるが(注7)、これは一面的な情報で、この敷地の地盤は固い蛇紋岩が浅いレベルまであって削るのが困難であったこと、また、急峻な崖を整置して平らな工場敷地を作るための土量配分上、自然にこの高さに落ち着いたのだという。そういう意味では、敷地地盤が軟らかく、モーター

グレーダーで容易に大量の掘削を行った福島第一、砂質土の浜岡原発、久慈川河口の堆積土の上の東海第二などと比べて特異な条件であった。

- 2) 東日本大震災の時、牡鹿半島の人びと 343 人が原発敷地内へ避難してきて、旧事務本館内で 3 カ月ほど避難生活を送ったという美談がある（注 8）。逆に言えば、原発が過酷事故を起こし、放射能発生源になった場合には、牡鹿半島の人びとは逃げ場を失って避難できないということではないか。
  - 3) 外部電源が 4 系統のうち 3 系統が停止し、1 系統だけが生き残った。つまり、首の皮一枚で生き残った状態であった。したがって、それほどタフであったわけではない。
  - 4) 地震の揺れは 567.5Gal であった。設計基準地震動は、建設時 375Gal、中越沖地震後の新基準で 580Gal として耐震工事見直しが行われた。そして、今後 1000Gal に耐えるように補強工事を行うという。しかし、補強工事は周辺の支持材を加えるという手方でしかできず、中心部分を立て替えたりはできない。果たして、万全な補強がかかるであろうか。そして何よりも、すでに設計限界まで揺すられた設備に、傷がないであろうかという点が問題である。
  - 5) その他、現在新規制基準に基づいて審査されている重大事故対策が果たして有効に機能するであろうか。
- といった諸点である。

#### 4. シンポジウム実行委員会

翌日午前には仙台駅近くのビルの集会室を借りて、11 月 23 日に行うシンポジウムの実行委員会を構成する多数の市民団体の代表が 20 名ほど集まって、10 時から 12 時まで協議した。予定しているシンポジウムのチラシは下記 URL の通りである。

<http://www.ccne.japan.com/?p=5913>

会場は 300 人収容のところをすでに予約してあるという。期待度は高い。

#### 5. 帰り道

帰りは、昼過ぎに仙台駅前を出、常磐自動車道を南相馬インターチェンジで降りた。原町を横切って 6 号線に出た。6 号線は川内村や葛尾村のような除染たけなわの地域よりもさらにダンプカーが頻繁に行き来して、埃っぽかった。もちろんマスクをしたが、すかさずで効果が十分とはいえない代物であった。

道路は 10 月 10 日に高校 1 年の女子生徒たちが清掃したというだけあって、きれいであった（注 9）。しかし、人が住めない無人地帯なので、殺伐としている。一筋の国道のみが通行可能でその両脇の家や店に人が入らないように、家や店ごとの入口にバリケードを張っている。



富岡町まで南下してから山手に向かい、常磐富岡 IC で高速道路に入った。高速道路は比較的すいていた。後は夕暮れの道を一路南下して 20 時 30 分に家に帰り着いた。

注 1. 『朝日新聞』 2015 年 10 月 24 日「檜葉町帰れぬ住民」

\*印は、「ふくしま復興ステーション」の情報で補った。

<http://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/26-2.html>

注 2. 除本理史・渡辺淑彦『原発災害はなぜ不均等な復興をもたらすのか』ミネルヴァ書房、2015 年

注 3. 「続 東北へ行こう」『筒井新聞』第 230 号

<https://sites.google.com/site/tsutsuishinbun/2011/230/zoku-touhoku-he-ikou>

注 4. 長谷川健一・長谷川花子『までいな村、飯館』七つ森書館、2014 年、p.124

注 5. 「東北バスツアー」『筒井新聞』第 257 号

<https://sites.google.com/site/tsutsuishinbun/2013/257/touhoku-bus-tour>

注 6. 「女川原子力発電所における防潮堤かさ上げについて（概要）」東北電力、2013 年 5 月 14 日

[https://www.tohoku-epco.co.jp/news/atom/\\_icsFiles/afieldfile/2013/05/14/13051401\\_SA\\_NKOU.pdf](https://www.tohoku-epco.co.jp/news/atom/_icsFiles/afieldfile/2013/05/14/13051401_SA_NKOU.pdf)

注 7. 添田孝史『原発と大津波 警告を葬った人々』岩波新書、2014 年、p.10

注 8. 東嶋和子「そのとき女川は 東日本大震災に耐えた原子力発電所」東北エネルギー懇談会、p.20

注 9. 町田秀子「子供がセシウムを吸い込む “被ばくイベント” が福島で決行された」『女性自身』11 月 10 日号、p.163



開沼博「根拠なき偏見許されず」『福島民友』2015年11月2日